

「語り」と時間表現

揚 妻 祐 樹

I はじめに

近代小説の地の文は、基本的にタ形で表現される。野口武彦 1994 はタ止めの成立をもって小説における三人称の成立とみており、三人称小説の地の文の基調となるタを「人称詞」と名づけている。三人称詞ということであろう。工藤真由美 1995 「かたりのテキスト」におけるタは、現実の発話行為時を基準軸とする〈回想的過去〉というダイクティックな意味ではなく、「非回想的な〈叙事詩的時間〉を提示する」(p195) とする。テンスのカテゴリーは「発話時」を基準に、それと表現される事態との前後関係から認定する。「発話時」が提示されるためには、発話をする時の誰彼の主体が現実中存在しなければならない。ところが三人称の場合、その主体が消去されるのだから「発話時」を基準にした事態の前後関係それ自体が問えないことになる。

問題は、文法的な時間表現を捉える際に、発話時を基準点に据えるのを基本とするような理解が妥当かということである。もしもそう理解するのであれば、三人称小説の語りにおけるテンスは、異例の、例外的な、特殊なものとなるはずである。そして、そうすると、なぜ発話時が起点となるべきテンスが三人称の語りにも転用が可能であるのか、説明が困難になるだろう。むしろ私たちが考えるべきは、三人称小説の如き語りも（勿論日常会話のテンスも）可能なような包括的な時間表現のありようではないだろうか。

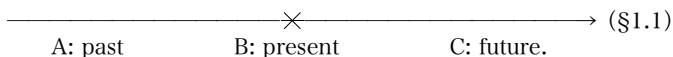
そのような立場から、「語り」と日本語の時間表現との関係について考える。

II 「発話時」をどう理解するか

1. 「発話時」とディスクール

イエスベルセン 1932 は「時制 tense」についてこう述べている。

By the essence of time itself, or at any rate by a necessity of our thinking, we are obliged to figure to ourselves time as something having one dimension only, thus capable of being represented by one straight line. The main divisions accordingly may be arranged in the following way:



「一つの次元だけ」(one dimension only) とは、私たちが実際に生活をし、そして発話をするその時間の流れ（だけ）ということであろう。イエスベルセンは人類共通の time と言語によって種々の変異のある tense を厳密に区別しなければならないと

しつつも、実際の言語運用からみてこの二つが密接に関係づけていることが理解される。そしてテンスが現実の時を物差しにするのであれば、過去・現在・未来を仕分ける基準点は実際の発話時（＝現在 present）にならざるを得ない（注1）。

テンスを理解するうえで発話時を基準点に据えるという理解の仕方は、言語を一回的な出来事（event）あるいは行為（act）として理解する立場からも支持される。

エミール・バンヴェニストは「話 discours」について次のように述べている。

もしおのおの話し手が自分自身の還元不能な主体性についての感覚を表わすために、（放送局がそれぞれに自分自身の「呼出記号」をもっているのと同じ意味で）個別の「呼出記号」を使用するならば、実際上人間の数と同じだけ語 langues が必要となり、通信はまさに不可能になるであろう。この危険を防ぐために、ことばはただ一つの、しかし可動的な記号、わたしを設けたのであって、おのおの話し手がそのつとただ自分自身の話の現存に関するかぎりにおいて、それを自分のものとするのできるのである。それゆえ、この記号は、ことばの行使 exercice に結びつけられているわけであって、話し手が話し手として宣言するものなのである。（「代名詞の性質」p238）

バンヴェニストの発言を敷衍するならば、代名詞は他の記号と異なり、その都度その都度（話）に置いて一回的な発話者と結びつけられている、つまり、代名詞は話においてその都度その都度、人称詞としての意味を付与されている、ということである。この理解をテンスの理解に転用するならば、事態の時間的關係づけもまたその都度その都度（話）に於いて与えられるものである、ということになるだろう。

言語には、一回的な行為 act、出来事 event、あるいは話 discours という側面があり、これを議論の中心に据えるならば、文法的時間表現もまた発話時を基準点に据えることになるだろう（注2）。

しかし一方で言語を生成すること（あるいは生成されること）と、生成された言語そのものとは区別されなければならないのもまた確かである。特に文章の場合、書き手、読み手は相互に対して現前しない。読み手が相手をするのは記号表現のみであり、それは一回的な行為、出来事、あるいは話、そして発話主体の痕跡にすぎない。読者ができるのは語り手を記号表現から遡及することだけである。語り手によって導かれる「時」は必ずしも発話者がその言語を発信した現実的時間とは限らない。テキストにおける時間表現を理解するためにはこの視点が重要であると考えられる。

2. 松下大三郎の「時相」

「話の現存」という問題から離れて言語記号のありようを考えると、言語記号は抽象的な価値であると言える。それが実際の運用に於いて種々の意味的バリエーションを生じるのであって、実際の運用の多様性だけを列挙しても言語の実相を捉えたこと

にはならない。

この意味で注目されるのが松下大三郎の「時相」についての考え方である。「時相」は動詞が担う種々の文法カテゴリー（「相」）の一種である。特に注目したいのは松下が「時相」を「動作の行はれる実際の時を示すものでは無くして単に時に関する観念の取扱方」（松下大三郎 1928、p414）として「従来の文法学」の「動作の行はれる実際の時」（p414）を以て解釈する考え方を否定しているところである。

喩へば時代物の芝居を観る様なもので、観る人は仮に我を其の時代に置いて観るから、劇中の事件は現在の事件として仮想される。それと同様文法上の動詞の時相は仮想基準に由つても過去、現在、未来が成立するのであるから実際の時とは区別して考へなければならぬのである。事件はこれから我に近づくものは未来、我に出逢へば現在、我と別れれば完了、通り過ぎて遠くなれば過去である。（松下大三郎 1928、p414～415、傍線揚妻）

文法上の動詞の時相はあくまで「観念の取扱方」なのだから実際の発話時と必ずしも一致するわけではない。たとえば「現在態」の時相であれば、

- 一 我今月を賞す …現在の事件
- 二 氷是水より冷たし…不変の性質
- 三 時宗、元使を斬る…過去の事件
- 四 明年日蝕あり …未来の事件

のように、＜我＞を実際の時ではないところに置いて時を捉えるのが「時相」のありようである。

時相は、現在態、完了態、過去態、未然態の四態に分かたれる（引用はいずれも松下大三郎 1928 より）。

現在態：「我（時の基準）を事件の行はれる時と同じ位置へ置いて事件と接触を保つとして事件の観念を取扱ふものである。事件が真の現在であれば時相の現在が真の現在と一致する。」（p415）

完了態：「我（時の基準）を事件の直後に置いて其の事件が我と別れるのを送るものとして事件観念を取扱ふものである。」（p418）

過去態：「我（時の基準）を事件の過ぎ去つた後に置いて之を回想追想するものである。」（p432）

未然態：「我（時の基準）を来るべき事件の前方へ置き、其れが漸次我に近づき来つて我と接触する（即ち現在となる）ものとして其れを迎へ待つとしての、観念の取扱方である。」（p441）

このうち「過去態」については、

従来此の態を客観的事実たる過去の事件を表すものとして之を過去態と名づけたが、それは説明がよくない。山田孝雄氏が「き」「けり」を回想の語であると云つたのは実に明論である。(p433)

とあるように山田孝雄の説を支持している。山田孝雄 1908 はキ・ケリにかぎらず、日本語の時間表現全般について法 (mood) の複語尾とみなしている^(注3)。

現在態、完了態、未来態については、松下は、アスペクトに近いイメージでとらえていると考えられるかもしれない。実際、寺村秀夫 1971 は、松下が現代語のタをアスペクトと理解している、と捉えている。確かに松下は、「我」を発話時に縛られるものではなく、未来にも不定時 (不拘時) にも置けるところを以て過去ではなく「完了」と捉えている。しかし、それをもって直ちに松下がタを今日言うところの「アスペクト」と理解したことになるかは慎重に考えるべきであろう。アスペクトは「出来事の時間的の局面に関わる文法的な表現のグループ」であり、テンスは「述べる内容と発話時との関連」をいうというのが常識的な捉え方であろう^(注4)。高橋太郎 1985 ではアスペクトを完了相 (～する・～した) と継続相 (～している・～していた) との対立として把握している。つまり今日私たちが理解している「アスペクト」の概念は、単純に一連の動作なり変化なりのどの局面を捉えるかということが問題になっているだけであり、そこに観念を理解するところの<我>は関与しなくてもよい。一方、松下の言うところの<我>は観念を理解するところの主体として捉えられている。だからこそ、今日的にはムード、ないしはモダリティの表現として理解されそうなキ・ケリについても時相の範疇で捉えるのである。つまり今日私たちが理解するところのアスペクトの観念においては<我>は問題にならないのに対して、松下における「時相」は観念を認識する<我>が起点になっている。ただこの<我>が発話時に拘束されない、というだけである。

松下は、現在、完了、過去、未来の四態に対応する文語・口語の形式について以下のように整理する。

現在態：(特に説明なし。以下の形式が接続しないものと見なしているようである。)

完了態 (文語)：つ・ぬ・たり・り

(口語)：た・て

過去態 (文語)：き・けり

(口語)：「口語に過去と云ふものが殆ど無い。文語の「ける」の「る」を省略した「け」といふ助辞があるが、これは唯「だ」及び「た」の第二活段へ 1928、p441) という。

未然態（文語）：む・じ・まし
 （口語）：う・よう・まい

特に現代語のタについては、松下は次のように説明する。

- | | |
|------------------------------|-----------|
| 1 御覧なさい、綺麗な月が <u>出</u> ました。 | 現在の完了 |
| 2 私は子どもの時は国に <u>居</u> りました。 | 過去を完了を表す |
| 3 <u>借</u> りたものは還さなければならない。 | 不拘時の事件の完了 |
| 4 明日 <u>伺</u> つたらばお目に掛れませうか。 | 未来の事件の完了 |

文法上「完了」といふのは事件の真の終結をいふのではない。仮に「我」をその事件の完了後へ置いて考へ、その事件の完了を表はすのである。(4)の例で言へば「我」を明日へ置いて考へるから「伺ふ」という動作は完了した動作と考へられる。(1)に於ては「我」が現在に置かれて考へるから、その完了は実際の完了と一致する。(1) [(2)の誤り]の事件が過去に属することは「子どもの時は」に由つて表されてゐる。「た」が過去を表すのではない。過去の事件を完了として取り扱ひ、その完了を表はすのである。「た」の自体に過去の意のないことは(3)(4)等の「た」を見てもわかる。p180～181 松下大三郎 1930

「私は子どもの時は国に居りました。」の表わす事件が過去に属すると解されるのは、タではなく「子どもの時は」という副詞句によるものである、というのは重要な指摘であると考えてる。実用的な観点からすれば、この文を、過去を表わすタの例として解するほうが便利ではあろう。しかし一方でこのような研究態度をとると、タについての包括的な理解が阻害される上に、語りとテンスとの関係を理解しようとする際にこの知見があまり役に立たないという問題をも生じる^(注5)。

タが過去時制を表わすものと理解することと、(松下の言う)完了として理解することの違いは、前者が時間の前後関係の定点(実際の発話時)を設定しているのに対して、後者は<我>をどこに位置に置くかが可變的であるという違いである。そしてタをこのように理解することで「語り」における「発話時」が理解できる道が開けるのではないかと考える。

III 「語り」から見た時間表現の諸相

1. 「話の現存」の解除

日常会話では発話者(一人称:わたし)と聞き手(二人称:あなた)が互いに現前する。動詞の表す時間的表現についても、発話者、聞き手相互の<いま・ここにあること>が起点となつて秩序付けられる。所謂テンスの表現はこのことを前提に時間的前後関係が秩序付けられる。

①昨日、東京に日帰りで出張をした。

事態が完了したところから物事を叙述する表現（完了）のタを、実際の発話時に〈我〉を置いて表現する時にその表現がたまたまテンスを表わす表現に見えるものになる、というのが松下の理解である。日常会話においては、「話の現存」（バンヴェニスト）という条件の下、〈我〉が実際の発話時に重なるのが普通であろう^(注6)。

それでは「語り」から見て、「話の現存」という条件が解除されるのはどんな場合であろうか。

第一にフィクションの語りである場合である。演劇やドラマの場合、観客・視聴者からみれば、架空の世界が目の前に展開されている。そこに流れている時間もまた架空のものである。役者がセリフを発話するとき、その「発話時」もまた物語内の時間的地平であり、観客・視聴者の立っている現実の時間的地平とは異なる。俳優が「Aは昼には帰ったよ。」といったとき、仮にこれを過去のテンスの表現と見なすとしても、その発話時は架空の世界のものだから、これを現実の発話時と見なされることはない。

第二に、書き言葉の語りである場合である。たとえば手紙やメールは発信者、受信者が明示されているから、その意味では日常会話の延長上と解することができる。しかし、口頭言語と文字言語の違いは、第一に言語の発信時と受信時のタイムラグがあるということ、そして第二に書き手、読み手が互いにとって不在であることである。たとえば、メールで「今帰りました。」とあるときの「今」が意味するのは、読み手にとってそれを読む現在ではなく、発信者の送信時間である。そしてそのことは書記言語から遡及的に理解するしかない。発信者についても書記言語から遡及的に特定するほかないわけで、場合によってはそのメールがなり済ましかもしれないというリスクが避けられない。手紙やメールでは、文字言語であるが故のこうした諸事情を閑却することによってのみ、つまり記号表現からそれに対応する特定の発話者、特定の発話時が遡及できると信じられる限り、その文字を日常言語の延長上として位置づけることができる。

しかし文字による表現が常に発話者、発話時に遡及可能であるわけではない。発話者、発話時についての自己言及がない文字表現の場合、私たちは「そこに何が語られているか」は理解できるとしても、「いつどこで誰がそれを語ったか」はわからない。後に詳述するように、この性格を積極的に利用したのが三人称小説である。

2. 落語の語り

落語では、物語内の時間的地平と現実の時間的地平の両方がみられる。落語家が客に直接語りかける場面（まくら、など）では現実の時間的地平で語っている。落語家が登場人物を演じている場面では物語内の時間的地平で語っている。三遊亭円朝の速記『怪談牡丹燈籠』（明治一七・1884）を挙げる。

①寛保三年の四月十一日 まだ東京を江戸と申しました頃 湯島天神の社にて聖徳太子の御礼祭を執行まして その時大層参詣の人が出て群集雑踏を極めました。

(A) 茲に本郷三丁目藤村屋新兵衛といふ刀剣商が御座いまして その店頭には善美商品が陳列してある所を通行かゝりました一人のお侍は 年齢二十一二ともお覺しく 膚色饗までも白く眉毛秀で目元キリッとして 少し癩癩もちと見え鬢の毛をグーツと釣揚げて結はせ 立派なお羽織に結構なお袴を着け 雪駄を穿いて前に立ち 背後に浅黄の法被に梵天帯を結め真鍮巻の木刀を佩したる仲間が従ひ 此藤新の店頭へ立寄りて腰を掛け陳列してある刀類を通覧て

侍「亭主や 其処の黒糸だか紺糸だか識別人が 彼の黒い色の刀柄に南蛮鉄の鐙が附いた刀は誠に善ささうな品だナ 鳥渡御見せ

亭主「ヘイヘイ、コリヤお茶を差上げな、今日は天神の御祭礼で大層に人が出ましたから必然街道は塵埃で嘸お困り遊ばしましたらう

と刀の塵を払ひつゝ、「此品は少々装飾が破損て居ります

侍「成程すこし破損て居るナ

亭主「ヘイ中身は随分御用ひに成ります ヘイ、御自佩料に成されても御用に適ひます お鉄信もお刀質も慥かにお堅牢お品で御座いまして

と言ひながら ヘイ御覧遊ばしませ と差出す手に取て見ましたが 旧時には通例御侍様が刀剣を買収時は刀剣商の店頭で抜刀て見て入ツしやいましたが あれば危険ことで 倘お侍が氣でも狂ひまして抜き刀を振り舞はされたら真個に剣呑ではありませんか (B) 今此お侍も真正に刀剣を鑑定お方ですから、先づ中身の反張工合から焼雲の有無より差表差裏銚尖 何や彼や吟味いたしますは流石に御旗下の殿様の事ゆへ通常の者とは違ひます (C)

『怪談牡丹燈籠』第一編 第一回

物語を語る際に、語り手<我>がどの位置に立つかは必ずしも明確ではない。冒頭箇所「寛保三年の四月十一日 まだ東京を江戸と申しました頃」とあるのは客と語り手(円朝)が共有する時間的地平からその事柄が既に完了していると述べているように見える。しかし、その後若き頃の飯島平左衛門が登場する件になるといつの間にか、語り手は物語内の地平に移っており、その移行がどこで行われているのか判然としなない。「旧時には通例御侍様が刀剣を買収時は(…) 倘お侍が氣でも狂ひまして抜き刀を振り舞はされたら真個に剣呑ではありませんか」の箇所は明らかに客と語り手が共有する時間的地平で語っているが、そのあとに「今此お侍も」で急に物語内の地平に引き戻される。

このように落語における語り手は<落語家一客>が実際に立っている時間的地平と物語内の時間的地平を自在に往還する。

また語り手がどの程度前景化するか、後景化するかも自在である。落語家が、上下を切りながら登場人物同士の掛け合いを続けているところでは、落語家自身はその登場人物の陰に隠れている。つまり後景化している。一方、物語を実際の現在から振り返った過去として語るAの箇所や、「倘お侍が気でも狂ひまして抜き刀を振り舞はされたら真個に劍呑ではありませんか」のように落語家が客に直接語り掛けている件では前景化していると言えよう。物語内においても語り手が前景化することがある。「流石に御旗下の殿様の事ゆへ通常の者は違ひます」は語り手が物語内において登場人物を批評している箇所である。

以上をまとめると以下ようになる。

		時間的地平	
		落語家・客が共有する現在	物語内
語り手	前景化	A、Bの箇所	Cの箇所
	後景化	×	登場人物同志の掛け合い

ただし<物語内>と<物語外>（落語の場合は、落語家と客が共有する現在）とが常に明確に区別されるわけではなく、この両者の区別が融解するような語りになる場合がある（4. 無人称の語り、参照）。

3. 一人称小説

聞き手を前に口頭言語で打ち明け話をするのであれば、これは「話の現存」という条件の下でテンスのカテゴリーが仕分けされる。もしこれをそのまま書記言語に移行させるとするならば、テンスは書いているその時を基準点にしてテンスのカテゴリーが仕分けされるだろう。しかし独白体の文章、特に一人称小説はこの仮定が成り立つとは限らない。一人称小説の語り手が立ちうる時間的地平は、第一に、物語内において登場人物たる<わたし>が事態の完了したところに立って語るということが考えられる。そしてもう一つは、<わたし>がその物語を回想しつつ書いている（といっても架空上の書く行為であるが）時間的地平に立って語るということが考えられる。

森鷗外『舞姫』（明治二三・1890）をみよう。

②（冒頭）石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静にて、熾熱燈の光の晴れがましきも徒なり。今宵は夜毎にこゝに集ひ来る骨牌仲間も「ホテル」に宿りて、舟に残れるは余一人のみなれば。

③（末尾）嗚呼、相澤謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一

点の彼を憎むころ今日までも残りけり。

冒頭の箇所は語り手（太田豊太郎）が物語の進行に立ち会いながら語っている。一方末尾の箇所は、語り手は、この物語を書いている現在に立ちながら、物語の世界を回想している。

語り手が物語内の時間的地平に立って語るのは、『舞姫』が小説であり、ストーリーを逐次的に語ることを主眼としているからであろう。

日常会話の場合、どうしても「話の現存」という条件に縛られるので、物語に没入して逐次的に語る事が妨げられるであろう。

4. 無人称の語り

4-1 語り手の前景化／後景化

無人称の語りは、ちょうど落語家が物語を語るスタイルに似ている。落語家は、自身が物語内の登場人物を演じる一方で、その外部に立って落語家一客が共有する時間的地平からまぐらの箇所を語ったり、登場人物に対して揶揄をしたりするような語り方をすることもある。二葉亭四迷『浮雲』第一篇ではこの語り口調を採り入れていることは知られている（前田愛 1973 参照）。『浮雲』（明治二〇～二二、1887～1889）第一篇、第一回冒頭の「髭尽くし」の件では、人物を揶揄する評言「いやお羨ましいことだ」「さりとはまたお気の毒な」、敬語表現「孰れも願を気にし給ふ方々」「反そつくりかへ身みッてお帰かへり遊ばす」、戯作的な誇張表現「之を召す方様の鼻毛は延びて蜻蛉も釣るべしといふ」「背黻よると枕詞の付く「スコツチ」の背広、オノマトペ「塗渡る蟻、散る蜘蛛の子とうよ〜ぞよ〜沸きでゝ来るのは」「ごり〜するほどの牛の毛皮靴」が認められ、第二回では、伝聞表現「叔父を便つて出京したは明治十一年文三が十五に成た春の事とか」、語り手のひとり言めいた表現「歴とした土族の娘と自分ではいふが……チト考へ物」、読者への直接的な語りかけ「チョツピリ孫兵衛の長女お勢の小伝を伺ませう」「是からが肝腎要回を改めて伺ひませう」などが認められる。

4-2 『富士に立つ影』

白井喬二『富士に立つ影』については既に揚妻祐樹 2018 で論じた。以下、簡単に要約する。

この小説については語りの上で次のような特徴がある。

- 語り手の顕在化する「無人称の語り手」の語りであること。
- 新聞連載小説であること。
- <語り手―読者が共有する現在の地平（物語外の地平）>と<物語内の地平>とを往還すること。

『富士に立つ影』（大正一三～昭和二、1924～1927）第一巻「裾野篇」冒頭では、

舞台となる富士山の裾野の地理が語られる。これは現実の地理を語っていると見ることができ、＜物語外の地平＞で語っていると見ることができ。その後ストーリーに入る。これは＜物語内の地平＞である。そしてこのセクションの末尾は、「アシタカ山の実録はこれから面白くなつて行くのである。」と、再び＜物語外の地平＞にたちもどって結ばれる。語り手が物語外に立ち得るのは「無人称の語り手」であるからである。

物語内においても、

④「やゝお前はその子供を知っているのか？」

聞いてはるまいと思つたくだんの若侍、筆をとりながらも花火師のいつたことを片耳に聞いてゐたものと見え、この時ふつと顔を振り上げたがその眼の底には今までの笑ひが消えて、ジツと熱心に見上げてゐる様子、無関心に装つてもこの侍も余程その子供といふのに心が引かれたものと思はれる。（裾野篇一・愛鷹山秘史・四）

下線部は、語り手が登場人物の心理内をわからない者として語っており、語り手が無人称であることのメルクマールが現れている。

『富士に立つ影』など時代小説における特徴的な表現にノデアッタ、ノダッタが挙げられる。

⑤といつたが、若侍の眼色はいよゝ熱心に白かばの葉陰に輝くのであつた。

（裾野篇一・愛鷹山秘史・四）

この表現は、物語世界を過去のものに置きながら、現在の立場から想起的に語っているという点で＜物語内の地平＞と＜物語外の地平＞の両者にまたがった表現ということができる。ノデアッタ、ノダッタはセクション末に現れやすい。新聞連載で言えばその日の読み切りの箇所である。読者を＜物語内＞から＜物語外＞へと導き、その日のお別れをしているとみられるところである。

亀井秀雄 1983 は、小説においてストーリーを外から語る語り手を「無人称の語り手」と称した。本稿ではこれに基づき、無人称の語り手の語りを「無人称の語り」と称することにする。無人称の語りはちょうど落語家のような語り手といえるであろう。ただ、亀井が言うのはあくまで書き言葉で、フィクションでもある小説の語りにおいてである。だから＜物語外＞の地平、言い換えれば語り手と読者が共有するはずの現実的な時間の地平を認めるとしても、それは落語のような現実の＜いま・ここ＞ではなく、文字表現から遡及的に理解されるところの地平である。

無人称の語り手は、自身を前景化させつつ＜物語内＞と＜物語外＞を自在に往還する。時代小説におけるノデアッタ、ノダッタはその往還の中で用いられる形式である。

なお注すれば、無人称の語り手は＜物語内＞＜物語外＞を自在に出入りするから、

物語と同時進行（〈物語内〉）において逐次的に物語を語ることもできる。ただ一人称小説の場合は語り手が物語の当事者であるのに対して無人称の語り手は傍観者であるという違いがある。

〈物語内〉〈物語外〉の区別は常に明確な一線が引かれているわけではなく、特にその区別が融解しているとみられる場合もある。「アシタカ山の実録はこれから面白くなって行くのである。」についても、一応〈物語外〉の地平と理解したが、見方を変えれば〈物語内〉〈物語外〉の区別を排し、両者を地続きのものとして語っているとも見える。築城の秘伝書『天坪栗花墨全』を手に入れた佐藤菊之助が一気に通読したさまを描いた後に、「これ仰雪門外秘本の立ち読みと称して後々まで佐藤菊太郎逸話中の一つに数へられた実話だ。」（『富士に立つ影』裾野篇 三 築城家前記四）もフィクションと現実との境を排した表現である。以下の『大菩薩峠』の例はその極端なものであろう。

- ⑥（神尾主膳に出入りしている「鏝」^{びた}が、外国人に日本文化を発信する「帝国芸娯院」なるものを打ち立てる構想を述べる件。そこにおいて日本文学も輸出するという。）「先づ御承認の、その小説といふ段になりますと、まづ長編大作といふところから見廻しまするてえと……日本に於きまして、上古に紫式部の源氏物語——近代に及んで、曲亭馬琴の南総里見八犬伝——未来に至りまして中里介山居士の大菩薩峠——大菩薩峠も、鏝の口から上つたことを光栄としなければなるまいが、御当人はしやあ、へとしたもので、（…）

（中里介山『大菩薩峠』「京の夢あふ坂の夢の巻」六十、p377）

4-3 語り手の濃淡（前景化・後景化）

『浮雲』第一篇にみられるような語りは、近年ではあまり一般的ではないだろうが、一見すると現代小説においても認められることがある。北杜夫『楡家の人々』（単行本は1964）冒頭に、楡病院の賄い場を預かる「伊助爺さん」の描写に次の件がある。

- ⑦しかもその服装がまたよくない。少なくともまかな賄いをあずかる以上もつと清潔であるべきなのに、その着物はすっかり黒ずんでいてしま縞模様も定かではなかった。厚ぼったい前掛も同様である。手にも顔にもすす煤がこびりつき、要するにまっ白に炊きあがった飯とはまったく対照的な存在といえた。この黒く煤けた背の低いせむしの男が、独自の職人気質をむきだしにして一心不乱に飯をかきまわしているさまは、どことなく奇怪で、いくぶん滑稽な光景でもあった。その身なり風態のため、彼は実際の年齢よりずっと老けて見えた。本当はまだ爺さんと呼ばれるのは気の毒な年齢だったのに。（『楡家の人々』第一部、第一章）

下線部は語り手が「伊助爺さん」を評しており、語り手が顕在化しているとみられ

る箇所である。『浮雲』と『楡家の人々』の語り手の違いは、第一に、『浮雲』が語り手と読者が共有する現在においても語るのに対して、『楡家の人々』ではそれが無い、という点である。第二に『浮雲』では語り手自身が詠嘆するのに対して、『楡家の人々』ではそれが無い、という点である。その分、語り手は後景化していると言える。

書記言語の場合、本来、肉声を持って語る語り手は受け手の前に存在しないわけであるから、語り手の存在は、読者への語りかけとか詠嘆とか有標の表現で読者に感知させるしかない。淡々と事実を叙述するだけなら読者は誰かがそれを語っているということを忘れてしまう。言い換えれば語り手が言語表現の陰に隠れる（後景化する）ことが可能である。一方口頭言語の場合、語り手は聞き手の前に存在し続けるのであるから、語り手は身の隠しようがない。書記言語の方が語り手の前景化・後景化には度合いがつけやすいものと考えられる。その極端な形が三人称小説であろう。

5. 三人称の語り

5-1 <物語外>の地平の不在

三人称の語りは、神の視点からの語りとも呼ばれる。語り手は、基本的には登場人物の心理も含めすべて「お見通し」という立場から語る。このような視点には通常生身の人間は立つことができないわけであるから、語りの基調は極力、生身の人間が語るかの如き口調（感動詞、読者への語りかけの口調など）は控えられる。

三人称小説の基調はタ形であるが、このタ形は日常会話におけるタ形とは異なる。日常会話における時制は、通常、語り手が語るその時を基準点に事態の時間的關係が秩序付けられるが、三人称の語りの場合、語り手と読者とが共有する所の現実の時間の地平、<物語外>の地平が不在である。例として有島武郎『或る女』（大正八・1919）を挙げる。

⑧ 新橋を渡る時、発車を知らせる二番目の鈴が、霧とまではいへない九月の朝の、煙つた空気に包まれて聞えて来た。葉子は平気でそれを聞いたが、車夫は宙を飛んだ。而して車が、鶴屋といふ町の角の宿屋を曲つて、いつでも人馬の群がるあの共同戸のあたりを駈けぬける時、駐車場の入口の大戸を閉めようとする駅夫と争ひながら、八分がた閉りかゝつた戸の所に突つ立つてこつちを見成つてゐる青年の姿を見た。

「まあおそくなつて済みませんでした事……まだ間に合ひますか知ら」

と葉子が云ひながら階段を昇ると、青年は粗末な麦稈帽子を一寸脱いで、黙つたまゝ青い切符を渡した。

「おや何故一等になさならなかつたの。さうしないといけない訳があるから代へて下さいましな」

と云はうとしたけれども、火がつくばかりに駅夫がせき立てるので、葉子は黙つたまゝ青年とならんで小刻みな足どりで、たつた一つだけ開いてゐる改札口へと急い

だ。改札はこの二人の乗客を苦々しげに見やりながら、左手を延して待つてゐた。
 (…)
 (『或る女』一、冒頭部)

野口武彦 1994 はこのようなタを、三人称小説の成立のメルクマールとして「人称詞」と名づけた。しかしタを日常語とは別用法（人称詞）として片付けてしまうと、日常会話では運用上テンスとしての用法も可能であるタが三人称の記述においても用い得るという問題が閑却されてしまうだろう。

このようなタの用法を理解する上で、次の要件を踏まえておく必要があろう。

- (1) タがテンスではなく、松下大三郎の言うように「完了態の時相」であること。テンスが現実の発話時という定点を必要とするのに対して、「完了態」と見なす場合、語り手は、事態の完了しているところに〈我〉を置いて語ることになる。〈我〉は発話時という定点に縛られることはなく可変的である^(注8)。
- (2) フィクションであること。話し言葉であれ、書き言葉であれ、語りが現実の時間的地平に立っているという前提であるとするならば、現実的にその語りが行われた時が確定され、その定点に添って時間的前後関係が判断されることになる。フィクションであるがゆえにそのような時間的定点の確定が問われなくなる。
- (3) 書記言語であること。たとえば落語の場合、語り手はどうしても客に現前しているから、客と落語家が共有する〈いま・ここ〉が不在であるかのように語ることに無理がある。書記言語の場合は、意図して語り手の痕跡（読者に対する語りかけとか、詠嘆とか、登場人物に対する揶揄とか）を残さなければ、語り手を後景化させることができる。

以上の条件によって、三人称小説におけるタ止め基調の記述が可能になる。三人称小説の場合、タは〈物語内〉の地平に立って、出来事が完了したところに〈我〉を置いて語る。〈物語外〉の地平（そこで語る語り手）が消去されることの不自然さは、フィクションであること、そして書記言語であることによって緩和される。特に明治30年代以降一般化する黙読の習慣は、文章が実際の誰彼の肉声によって語られる印象の希薄化、閑却化をもたらしたことであろう。黙読の習慣は三人称の語り、そして〈物語外〉の地平の不在化をもたらす社会的条件であったと考えられる^(注7)。

5-2 歴史的現在

『或る女』の地の文はタ止めが基調であるが、ところどころ非過去形が用いられるところがある。

- ⑨（「なべての女の順々に通つて行く道を通る事」について）通つて見ようとした事は幾度あつたか解らない。かうさへ行けばいゝのだらうと通つて来て見ると、いつ

も飛んでもなく違つた道を歩いてゐる自分を見出してしまつてゐた。而して蹠いては倒れた。まはりの人達は手を取つて葉子を起してやる仕方も知らないやうな顔をして唯々馬鹿らしく嘲笑つてゐる。そんな風にしか葉子には思へなかつた。(十一)

⑩葉子は何んとなく性の合はないこの妹〔愛子〕が、階子段を降り切つたのを聞きすまして、そつと貞世の方に近づいた。面ざしの葉子によく似た十三の少女は、汗じみた顔には下げ髪がねばり附いて、頬は熱でもあるやうに上氣してゐる。それを見ると葉子は骨肉のいとしさに思はず微笑ませられて、その寢床にいざり寄つて、その童女を羽がいに軽く抱きすくめた。而してしみとその寢顔に眺め入つた。貞世の軽い呼吸は軽く葉子の胸に伝わつて来た。 〽

(六)

⑪ そこだけは星が光つてみないので、雲のある所がやうやく知れる位思ひ切つて暗い夜だつた。おつかぶさつて来るかと見上ぐれば、眼のまはる程遠のいて見え、遠いと思つて見れば、今にも頭を包みさうに近く逼つてゐる鋼色の沈黙した大空が、際限もない羽を垂れたやうに、同じ暗色の海原に続く所から波が湧いて、闇の中をのたうちまろびながら、見渡す限り喚き騒いでゐる。耳を澄して聞いてみると、水と水とが激しくぶつかり合ふ底の方に、
「おうい、おい、おい、おうい」
と云ふかと思はれる声ともつかない一種の奇怪な響が、舷をめぐつて叫ばれてゐた。(…)

(十三)

⑨は、葉子の心話内の表現であり、しかも「そんな風にしか葉子は思へなかつた。」という文に対して従属的な内容である。⑩は貞世の描写であるが、葉子の視点からとらえられた表現である。⑪の例は、語り手の風景描写とも葉子の目に映ずる風景のありようとも見える表現と見える。葉子の心理に重なる度合いは⑨→⑩→⑪と弱まっていると見ることができよう。

こうした非過去形は歴史的現在 historical present、ないしは劇的現在 dramatic present と呼ばれる (O. イエスパーセン 1932)。細江逸記 1932 は『ハムレット』のホレイシヨウのセリフにおける歴史的現在を取り上げ、この例がホレイシヨウの視点に立っていることを指摘している。しかし細江のこの説明だけを読むと、あたかもある登場人物の視点に立って語るのが歴史的現在の本質なのかと思われかねないところが問題であろう。

歴史的現在は三人称小説以外でも用い得るが、三人称小説の語りの場合、〈物語外〉の地平は失われている。語り手は〈物語内〉において語る。ある物事が完了したところに語り手自身一松下の言う〈我〉を置き語る時に夕が用いられ、同時進行のところにく〈我〉を置いて語る時に非過去形になると考えるべきで、登場人物に視点に重なるかどうかは、当該の文脈内における効果であろう。⑨～⑪の例に見るように、各々

の文脈における効果が登場人物の視点と語り手との多様な距離感を生成すると考えられる。

IV 結論

時枝誠記 1941 は、言語とは主体の一回的過程であるとした。確かに言語を生成する過程は一回的ではある。しかし時枝の問題は、言語を生成する過程と、実際に生成された言語表現、記号表現とを区別しなかったところである。時枝の言語論は言語表現そのものを主体の言語生成過程そのものとして分析しようとしている。

時枝に限らず、文 sentence を主体の精神的活動そのものと見なす考え方は、統覚作用を「句」の成立の根本に置く山田孝雄にも認められるし、西洋でもたとえスウィートは、

A sentence is a word or combination of words capable of expressing a thought, that is, a combination of a logical predicate with a logical subject. (NEG §49)

のように「思考を表現できる」(capable of expressing a thought) として思考と文との連動性を指摘している。文については種々の説明がなされているが、今日の説明でも以下のように主体の意識との連動性が強調される。

文を言語記述における真に有効な概念に導くためには、その「まとめり」が、話し手の意識の推移を少なくとももる程度は許容するものでなければならない。

『日本語学大辞典』（東京堂出版 2018）「文」の項、延定利之執筆

主体と思考活動や意識、文の生成活動との連動性を強調することは、逆に主体の活動と、活動によって生成された文を区別することを軽視、ないしは閑却することにつながる。言語表現は主体の生成過程そのものではなく、生成過程によって生じた産物である。そしてその産物は主体に属するものでは無く、その言語社会全体の共有資材となる、と考えるべきである^(註9)。

そして、共有資材であるためには、抽象性という性格が不可欠である。バンヴェニストに言う通り、話し手ごとの自身の唯一無二の主体的感覚を表現するには、「実際上人間の数と同じだけ語 langues が必要となり、交信はまさに不可能になる」からである。そして現代日本語の夕に関して言えば、この抽象性は<我>の変異性という形で現れる。松下が考えたように、夕におけるは<我>の立ち位置は事態が完了したところに<我>を置くということを表わすのみで、唯一無二の発話時、<いま・ここ>ではない。これが日常会話においては、自己言及的に発話をしている<いま・ここ>の本人が<我>の位置に座るといっただけである。

そしてこのような認識に立つてはじめて、三人称小説におけるタを理解できるのではないかと考える。

注1: このテンスについての考え方は、基本的に今日にも継承されていると思われる。たとえば仁田義雄 1997 ではテンスを「言語事態の成立時と発話時との時間的先後関係を表し分ける文法カテゴリ」とし、『日本文法事典』(大修館書店 2014、日本文法学会編)の「テンス」の項(執筆、金水敏)では、「テンスとは元来(西欧諸語において)「発話時を基準にした出来ごとの先後関係」と対応する「動詞の形態的対立」を指す概念である」とする。

注2: J.L. オースティンの言語行為論などはその方向で議論を突き詰めたものと解される。オースティンのいう illocutionary act (発話内行為)は「何かを言うことで何かを行う」、つまり発話することがある行為(約束、命令、遺言、宣言など)を行うことである。発話内容が発話をしている行為を自己言及するのであり、自己言及する自身の行為そのものが発話内容に具体性を与える。「発話内行為」が可能であるためには、「話の現前」という条件、ないしは「話の現前」に遡及できるという条件(特に書記言語の場合)が必要であろう。

注3: 山田孝雄 1908 は「哲学的にいへば時間は実有のもの」(p416)ではあるが、「吾人が之を認識するは主観の存在を第一条件とせざるべからず」(p416~417)として、現在・過去・未来の三別もまた現実の時間ではなく主観と時間経過との関係から理解されるべきであるという。だから「吾人の思想の立脚地如何によりて同一の時も未来と思はれ、現在と認められ、過去とも追憶せられる」(p417)のである。そして「メークルジョン氏」の mood の説明を引きながら、日本語において時に関する文法カテゴリーを tense ではなく mood と見るべきことを示唆する。

注4: 日本語学会『日本語学大辞典』東京堂出版 2018、「アスペクト・テンス・モダリティの体系」の項、森山卓郎執筆)

注5: 文法が国語教授、ないしは日本語教授において学習者の役に立つものでなければならぬ、という考え方が「実用主義」の立場であろう。この場合、小難しい理論よりも、学習者にも理解しやすく、そして学習者が実際にその文法に従って日本語運用がしやすいということが第一の目標となる。そして実用文法研究に大きな足跡を残した代表的な研究者の一人として、寺村秀夫を挙げるのは不当ではなからう。寺村秀夫 1971 では「タ」を一義的に捉える説(松下大三郎、山田孝雄、細江逸記など)と多義的に捉える説を紹介したうえで、先行研究からは「日本語の話し手が、いったいどのような構文の中で、またどのような述語を頭の中に持つとき、ルその他の形式ではなくてタを選ぶのか、という問いに対しては、なお十分な答えは(…)得られない」とする。このような問題を解決するのは「ただに理論的に興味ある問題であるだけでなく、たとえば日本語を外国人に理解させるといった上からも緊急の事」であり、つまり実用主義の立場からも問題視されるというのである。そして、

夕をアスペクト、テンス、ムードにまたがる性質のものとして（ないしは「三つの範疇そのものが截然と分かちがたい」ものとして）捉えようとする。寺村は実際の記述においてはこの三範疇に分けて説明しており、事実上、多義的な記述になっている。金田一春彦 1991 は、寺村が夕を過去と完了と区別したことを評価し、

私はそれまで H 博士の影響で、単語で同じ形で意味の近いものは、極力意味を一つにしぼろうとして、苦勞していた。そういう必要がないことを教えられて、私は久し振りに雨後の青空を仰いだようにスッキリした気分になった。この恩恵は大きい。p90～91

という。

一方、一義的に夕を理解しようとする立場の細江逸記 1932 は、夕に限らず、一つの言語形式が実際の運用において多様に変化する表現を「垂幕画面上に投げらるゝ影画（かげ）^(上げ)」としたうえで、

言語学者乃至文法学者は須らく垂幕の背後に動く實體其物を捕へなければならぬ。即ち吾々は諸の効果を総合して本質を捕へ、本質を捕へて効果を窮め、分析と総合、総合と分析、而して更に分析と総合の完成を期しなければならない。分析は最も尊ぶべきところであるが、分析のしばなしは私は採らない。(p97)

「實體其物」（「本質」と言い換えてもよからう）の抽出には慎重が必要である。例えば現代日本語のタラという形式は、実は二筋の流れが合流したもので、一つはタラバ（タリの未然形+バ）のバが脱落した形で仮定を表現するものと、タレバが音変化をしてタラとなって偶然確定条件を表わすものとが同一形式として扱われている。この二者を同一区別しないでタラから「本質」を抽出したとすれば、誤った結論にたどり着く危険がある。あるいは逆に同一語の用法で、かなり以前に二道に枝分かれをしてしまった場合もありえるだろう。現代語においてそこから同じ「本質」を抽出するということがどこまで妥当かも問われるだろう。

とはいえ、明らかに通底性のあるものを別々に記述するのは、実用的ではあつたとしても、正確に言語を捉えたことにはならないであろう。種々の運用にはそれを統べるもの（いわゆる「本質」）があるはずだからである。言語に「本質」があるはずだというのは、研究というものがすべからく「本質」を求めるべきであるという「信念」に基づくものではなく、言語の価値が抽象的なものであつて、その価値は個々の運用を超越しているはずだからである。そしてこの理解に立たなければおそらく三人称の語りにおける夕も理解ができないであろう。

注 6：日常会話の夕が額面通り一人称単数の資格で発せられているかどうかは、日本語の場合保留をつけなければならない。「良かったね。」という発話は「私は良いと

思う。」という意味のみならず、「あなたもそう思うでしょう。」という同意を求めているものでもある。「(くさやについて) あの匂いと味は日本人でなければ絶対に分からないよ。」(『美味しんぼ』61 よくぞ日本に生まれけり p125) なども、個人の資格で発話しているというより、きつとみんなもそう思うはずだ、という期待に基づいて発話していると見なす方が妥当なのではないか。この場合の主体は一人称単数 (I) ではなくというよりも、(特に根拠があるわけでもなく)「みんな」の代表者、あるいは代弁者として語っているということができる。そうするとこの表現におけるムードの意味(完了したことについて安堵する心的態度)もまた個人に帰されるものではなくなる。新聞の見出しなどにみられる「うれしい初優勝」などの表現もまた、客観報道ではなく「みんな」の代表者として表現している。揚妻祐樹 2002 参照。

注7: 野家啓一 1990 では口承文芸を衰亡させた条件を外的、内的の二つに分ける。そして、外的条件は「印刷術の発達」であり、内的条件は「内面」の成立と「告白」の制度化」であるとする。三人称の語りもまた話者の不在を前提にしており、これを成立せしめる外的条件として印刷文化の成立を挙げることができよう。

注8: 英語の過去形が額面通り過去を表わすかどうかとも議論がある。細江逸記 1932 は、山田孝雄 1908 の議論を受け、英語においてもテンスが実はムードの一種であるとしている。

注9: 時枝は語構成要素、語、詞+辞、文それぞれに主体の生成過程は認めるものの、それらがより上位のレベルにおける素材に成り下がることについて何ら説明をしていない。また文章は何者にも従属せず完全に自立しているというが、文章も他の文章に引用される時にはその素材に成り下がる。揚妻祐樹 2019 ではこれを批判し、言語表現は主体の産物だとしても同時にそれはその言を話す人々の共有の資材になることを論じている。

参考文献リスト

- 揚妻祐樹 2002: 「現代の「枕詞」—「嬉しい初優勝」という表現について—」(佐藤喜代治編『国語論及9 現代の位相研究』明治書院)
- 揚妻祐樹 2018: 「時代小説におけるノデアッタ・ノダッタ」(藤田保幸・山崎誠編『形式御研究の現在』和泉書院、所収)
- 揚妻祐樹 2019: 「文章論序説(一)—言語表現における「成り下がり」について—」(『藤女子大学国文学雑誌 99・100 合併号』2019.3)
- 亀井秀雄 1983: 『感性の変革』(講談社)
- 金田一春彦 1991: 「寺村秀夫君の逝去を悼む」(『日本語学』vol.10、1991.2)
- 工藤真由美 1995: 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』(ひつじ書房)
- 寺村秀夫 1971: 「‘タ’の意味と機能」(岩倉具実教授退職記念論文集『言語学と日本

- 語諸問題』くろしお出版所収、寺村秀夫『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版 1984、再録)
- 時枝誠記 1941：『国語学原論』(岩波書店)
- 仁田義雄 1997：『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—』(くろしお出版)
- 野家啓一 1990：「物語行為論序説」(『物語 8 (現代哲学の冒険 第八巻)』岩波書店)
- 野口武彦 1994：『三人称の発見まで』(筑摩書房)
- 細江逸記 1932：『動詞時制の研究』(泰文堂)
- 前田愛 1973：「音読から黙読へ—近代読者の成立—」(前田愛『近代読者の成立』有精堂、所収)
- 松下大三郎 1928：『改撰標準日本文法』(紀元社)
- 松下大三郎 1930：『標準日本口語法』(中文館書店)、徳田正信編『増補改訂標準日本口語法』(勉誠社 1977)
- 山田孝雄 1908：『日本文法論』(宝文館)
- イエスバルセン, O.1932 : Jespersen, Otto. “A Modern English Grammar on Historical Principles” (IV) London, George Allen & Unwin LTD, 1932.
- オースティン, J.L. : “How to Do Things with Words”, Harvard Univ. Press, (1955 飯野勝己訳『言語と行為いかにして言葉でものごとを行うか』講談社 2019)
- スウィート, H. 1891 : Sweet, H. “A New English Grammar: Logical and Historical” (NEG) . Oxford, Univ. Pr, London
- バンヴェニスト, É. : 1956 : Benveniste, É, “For Roman Jakobson”, Mouton & Co., The Hague, 1956. “Problèmes de linguistique générale”, Gallimard, Paris. 1966. 再録。(É. バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』(岸本通夫監訳、みすず書房 1983)

底本

- 有島武郎『或る女』：『有島武郎全集 第四巻』叢文閣 1924
- 北杜夫『楡家の人々』：新潮社 1964
- 白井喬二『富士に立つ影』：初出(大正 13・1924.7.20 ~ 昭和 2・1927.7.2、『報知新聞』による)。
- 中里介山『大菩薩峠』：『大菩薩峠 第十八巻』彩光社 1953
- 二葉亭四迷『浮雲』：『二葉亭四迷全集 第一巻』筑摩書房 1984
- 森鷗外『舞姫』(明治二十三年一月「國民之友」第六卷六十九號附録)
- 三遊亭円朝演述・若林珣蔵筆記『円朝全集 第一巻』(岩波書店 2012)。なおこの底本は 1884 (明治 17) 年 7 月からの全十三編の単行本 (東京稗史出版社) による。